

探究を探究する

2025年度山梨県立大学 地域研究交流センター 地域貢献事業
「探究を探究する：山梨県立甲府第一高等学校「探究科」をフィールドとして」
成果報告書

2026年2月

目 次

はじめに 橋爪大輝 1

〈探究〉とはいかなる営みか？
— シンポジウム記録 3

音楽と平和 — 探究の概要 藤田怜也 43

探究、そして〈探究の探究〉を経て
荒井美乃里／飯野郁斗／後藤陽希／
中山蒼平／宮坂元基 45

「探究とは何か」プロジェクトに参加して
渡部敬子／中 源博 51

なにが私たちを〈問いを問う存在者〉
にするのか 橋爪大輝 53

私が私と世界に向き合う — 探究とは何をす
ることか 橋本憲幸 55

〈探究〉の価値 森下翔 57

日常の探究：宇宙と一輪の花
山崎スコウ 竜二 59

はじめに

橋爪 大輝

(山梨県立大学人間福祉学部・本事業代表)

〈それは何であるか？ Was ist das?〉——私は、この問いは哲学にとってもっとも本質的な問いの、少なくとも一つであると思っています。たしかに、本質を問うこの問いは、本質という概念の身分が後退するとともに、いくぶん失効しつつあります。とはいえそれでも、ある物事を学的に理解したり、実践的に操作したり、あるいは公共的に議論したり共有したりするとき、この問いはいまでも有効ではないでしょうか。

本冊子は、2025年度山梨県立大学 地域研究交流センター 地域貢献事業「探究を探究する：山梨県立甲府第一高等学校「探究科」をフィールドとして」の成果報告書です。この事業で問うたこと、そして本報告書がその答えの一端を与えようとしているのは、〈探究——それは何であるか〉という問いです。

この地域貢献事業では、2018年告示の現行学習指導要領において「総合的な学習の時間」から名称変更された、いわゆる「総合的な探究の時間」、通称「探究」という科目（村松灯「探究学習を支える新しい学力観とそのジレンマ」探究学習研究会編著『「探究学習」とはいうけれど——学びの「今」に向き合う』晃洋書房、2024年、3頁）に焦点を当ててい

ます。この「探究」という科目は、いやそのまえに、そもそも人間の行う探究という営みは何なんだ。そうした問いを、山梨県立大学の哲学・思想系教員を中心に、原理的に考えていこうとした

2 | のが、本事業の発端です。

そのさい、私たち県大教員は、山梨県立甲府第一高等学校（甲府一高）の生徒さんや先生方に、私たちの〈探究〉のパートナーになっていただきました。甲府一高は「探究科」という独自の科を設け、この科目の取り組みに非常に力を入れている一方で、それだけにこの科目についての悩みや問題意識を強く持っておられたからです。生徒さんたちのうち、2年生の13班の生徒の皆さんに、実際の探究活動の様子を見せていただくとともに、いろいろな意見交換をさせてもらいました。そのやり取りも踏まえて、2025年12月19日に「〈探究〉とはいかなる営みか？」というシンポジウムを山梨県立大学飯田キャンパス C101 教室で開催しました。

本報告書の内容は、そのシンポジウムの文字記録に始まり、2年生13班の探究活動（「音楽と平和」）の梗概、13班の生徒たちと探究科顧問の先生方のエッセイ、そして、それらへの応答でもある県立大の哲学・思想系教員によるエッセイです。じっさいの探究の実践を見つつ、探究についてより普遍的・抽象的に考察することを企図して、このような構成を立てました。

本報告書の試みが、探究しようとするすべてのひと、そして探究を探究しようとするすべてのひとにとって、ひとつの手がかりになること。それが、本報告書の執筆者たちの願いです。

〈探究〉とは

いかなる営みか？

シンポジウム記録

以下は、2025年12月19日に山梨県立大学飯田キャンパスC101教室で実施されたシンポジウム「〈探究〉とはいかなる営みか——甲府第一高校探究科の生徒たちと考える」の記録である。当日は、まず甲府第一高校探究科2年第13班の生徒たちのプレゼンテーションがあったのち、フロアとの質疑が行われ、そのあと県立大哲学・思想系教員のコメントがあって、ふたたびフロアとの全体討論が行われた。

山崎スコウ竜二（以下、**山崎**） 皆さん、こんばんは。お集まりいただきありがとうございます。今日は「探究の探究」ということで、「探究とは何か」を一緒に考えたいと思います。今日は特別ゲストがいます。甲府第一高校の皆さんです。

〔会場、拍手〕

山崎 甲府第一高校には「探究科」というのがありまして、探究している、はず。もうちょっと丁寧に説明します。まず「探究」というものは、高校の必修科目として皆さんがいま取り組んでい

ます。その中でも「探究科」というものを高校として設けている、そこが、こちらの生徒さんたちが所属する高校の特徴です。私は半年くらい前にこちらの高校のみなさんと関係ができるようになって、いろいろなところで交流が始まったんですが、探究科の先生方とお話している中で、気がついたことがあります。探究科で探究を教え、そして探究を実施しているんだけど、「探究って何なんだろう」というのが、実は先生も分かっていない……と言うと、ちょっと大げさかもしれませんが、迷うところがある。この迷いを皆さんで、あるいは地域で共有できないかなというのが、この本日の企画のきっかけです。

「探究」とは言うものの、それは、例えば似たような言葉で「研究」、あるいは従来の「教育」と違うのか。このあたりが差別化という意味で、あまりはっきりしないということです。もう一つは、そもそもじゃあずばり探究って何なんだ、いかなるものなのかということ。これが第二の関連する問いです。こういったことを今日は、抽象的な話だけじゃなくて、例を踏まえながら具体的に検討できたらなあ。ということで、今日は数あるグループの中でも、こちらの代表選手に紹介してもらいたいなと思っています。ちょっと今日試合の練習でやむなく来れない、という方もいまして、今日は5名ですが〔本来は6名〕、チームで皆さん活動しています。名前も言ってもらって、どんなことをやってきたのか、いるのかということを紹介してください。ではよろしく願います。

橋本憲幸（以下、橋本） そのまえに、大まかな流れを説明したほうがよいのでは。

山崎 あ、そうですね。ちなみにこのプロジェクトは橋爪先生が

代表です。橋爪先生から一言をご紹介いただきましょう。

橋爪大輝（以下、橋爪） では私から今日のおおまかな流れをお話しさせていただきたいと思います。

| 5

一応、当初の予定では最初に主旨説明と登壇者紹介になっていたんですけども、県大の哲学・思想系の教員の方でプレゼンテーションしたり座談会したり、という部分も後で設けようと思っているので、我々教員の自己紹介はそのタイミングでできればいいかなというふうに思っています。ということで、まずはいま紹介があった一高の生徒さんの皆さんからプレゼンテーションをいただきたいと思います。

それから、そのプレゼンテーションの中身に関して質疑の時間を設けよう。「探究」という科目では、非常に質疑の部分が大切にされているということがある部分がありますので——お互いおっかなびっくりだと思うんですけど——フロアにいる皆さんからも、今日発表いただく皆さんに参考になるような質問やコメントをしていただければと思います。もしよければ、同時に「探究ということについてこういうことを思いました」みたいな、そういう話でもいいかなというふうに思うんですね。いろいろなコメントをいただければと思います。

その後、私たち哲学・思想系のメンバーでちょっと思ったことを話してみたいなことをさせていただこうかなというふうに思っています。その後また座談会の後に、フロアも含めての議論をもう一度できればと思います。以上が、今日のイベントの流れです。

では、もう発表をお願いするということでいいですか。

山崎 そうですね。一つ付け足せば、できるだけインタラクティブにしたいので、質疑応答の中で全体フロアに開いていきますの

で、ぜひコメント、質問などよろしく願います。

〔甲府第一高校探究科「音楽と平和」班の発表が行われる。〕

| 6

藤田^{れいや} 怜也（以下、藤田） みなさん、こんばんは。甲府一高2年、探究科の藤田といます。今日はよろしく願います。

後藤^{はるき} 陽希（以下、後藤） 13班の……えっと、緊張します。〔パワーポイントの第1面に表記された名前を指して〕下の段の真ん中の人間です。〔会場笑い〕よろしく願います。

荒井^{みのり} 美乃里（以下、荒井） よろしく願います。2年13班の荒井美乃里と言います。この班では班長をさせていただきます。今日はよろしく願います。

飯野^{いくと} 郁斗（以下、飯野） 2年13班の、いちおう副班長の飯野郁斗です。願います。

宮坂^{もとき} 元基（以下、宮坂） 13班の宮坂元基と言います。本日はよろしく願います。

では早速始めさせていただきます。「音楽と平和」、甲府第一高校2年13班。

この班はもともと「音楽が好き」という共通点を持つメンバーで集まりました。そこで音楽に関わる探究ができないかを考えました。そのため、音楽を主なテーマとして何ができるかを考えました。これはその時の考えを簡略化した図です。

はじめは、ブルックナーという作曲家の交響曲第9番に着目しました。この曲は未完成の作品として有名ですから、その補筆を

しようと考えたのですが、限られた時間や専門的な知識の問題でとても難しく、別の内容のほうが良いと考え、平和と組み合わせるのが良いのではないかと考えました。

音楽には平和の象徴とした作品もあることや、戦争のプロパガンダに使われたといった一面もあることから、音楽と平和を結びつけられると考え、探究していくことに決定しました。

その中でヒトラーの事例を参考にします。ヒトラーは御前演奏会を開催するなど芸術に傾倒していたことから、「戦争と平和」「音楽」という両側面から参考の例の一つとして適すると言えるだろうと考えます。よってタイトルの通り、「平和と音楽」という二つの軸をもって探究をしていきます。

音楽というのは、芸術の中で最も身近と言えるほど、すぐそばに、日常に溶け込んでいるものです。一方、平和という言葉自体は身近ですが、とても漠然としています。

この探究は、そんな平和と音楽を結びつけ、音楽が平和および社会に与える影響を明らかにすることで、少しでも平和について見方を広げて、身近なものとし、そして音楽についても見直す動機となれば良いと考えています。また、平和というものの本当の意味を見つけるための足掛かり、並びに、現在平和とされているものについて、今一度、全ての人が考える機会となることができるはずです。

飯野 この探究での最大の、いわば根もとにある問いは「音楽が世界を平和にするのか」というものです。そして、この探究の問いに対し、「音楽は世界を平和にする」という仮説を立てて、探究を進めていきます。

次に、仮説検証のためにすべきことをリスト化しました。一つは、そもそも問いで扱う「平和とは何か」について、文献調査な

どを基に詳細に定義付けて、不透明な目標を明確にしていくことです。二つ目は、音楽が実際に社会に影響を与えてきた事例を調べて、音楽による平和の実現が可能なのか、またそれがどれくらい難しいものなのかについて調査していくことです。そして最後に定義付けた平和と、音楽が社会に影響を与えた事例の共通点ないし、相違点を現代に当てはめて、音楽が実際に今この世界を平和にするのかについて、私たちの中で独自の意見を出していきたいなど考えています。

これまでの探究は、主に「文献調査」、「話し合い」、「まとめ」の3つのサイクルを繰り返して調べてきました。

まず文献調査では、3つの大きなテーマとして、「音楽」「ヒトラー」「戦争と平和」というテーマに絞って文献を調査していきました。この文献調査では、基礎的な知識を身につけて疑問点を浮き彫りにすることで、探究の見通しを立てることが目的です。そして、この文献調査を踏まえて疑問を立てました。

荒井 そして、その一つの「平和とは何か」というものを、次の探究内容に決定しました。平和には、想像以上に多くの捉え方や考え方があるとして、平和を取り扱う上で、それについて明確にしておくべきだと考え、この探究の上での平和の定義を行いました。まずは、個人個人が平和とはどんなものなのか考え、また、文献を読んだ上での考えの変化などを付箋にまとめて、グルーピングしていくことで考えをまとめていきました。そして、平和を「個人として考える平和の状態が、より多く集まることで、社会全体が平和に近づく」と置きました。そして、ここからは、2学年になって現在の体制での探究です。

まずは、顧問の先生方と平和についての話し合いを行いました。それによって、それ以前に私たちになかった視点を得たり、私た

ちの平和の定義から外れてしまう平和について考え直すきっかけとなりました。

また、山梨県立大学の4人の先生方、この会を主催して下さった先生方と2回話し合いを行いました。〔2025年〕10月17日の1回目の話し合いでは、「私たちが音楽の中でも興味を持っている範囲が異なるということから、一人一人が気になる範囲を掘り下げていくと良いのではないか」、「ゲッベルスの伝記映画など、本や論文以外の選択肢も増やして調査すると良いのではないか」、「平和と音楽それぞれの定義を考え直すと良いのではないか」、などのアドバイスをいただきました。

また11月26日の2回目の話し合いでは、2つの視点からアドバイスをいただきました。まず1つ目は、探究内容のアドバイスです。問いを細部化していく。私たちは平和というものをテーマに掲げているんですけど、それを「平和とは何か」やその構造、構成要素に分けて考えていくと良いのではないか。また逆方向で考えると良いのではないか。音楽は世界を平和にもしなければ不幸にもしないという、どちらでもない、またはどちらでもあるという可能性を考えると良いのではないか、というようなアドバイスをいただきました。次に探究自体のアドバイスで、文献を読む能力であったり、疑問にこだわること、そして私たちの問いを問い続け、少しでも疑問に思ったことがあれば、問いを変えていくというような作業が必要だとアドバイスをいただきました。

これらの話し合いを通して、私たちは課題と見通しを行いました。まず課題では、以前行った平和の定義というものは、平和の状態を位置づけただけであって、定義として成り立っていないというふうな課題ができました。また、音楽の定義もされていないということで、現段階では平和についての考えは、音楽とあまり関わらせることができていないということで、これからは音楽と

も結びつけなければならない。また、文献の咀嚼がうまくできていたのかを、再び考え直さなければいけないという課題も出ました。そして、今までの見直し、問いを改めて問い直すということで、自分たちの探究を見つめ直し、再び進めていくことに決定しました。

飯野 次に音楽が社会に影響を与えた事例として、ジョン・レノンの「イマジン」を調べました。「イマジン」の中でジョン・レノンが歌っているのは、過不足なく、人種間、及びその内部での隔たりや争いがない、また死後の世界や死ぬ理由もない、そんな人類全員が平等に生きる世界を歌っていると、僕は思いました。死後に救いを求めるのではなく、また誰かから略奪して私腹を肥やすのでもなく、この世界で誰もが生きていく、そんな社会を望んでいて、そう考える人は他にもたくさんいるから、ただの夢物語ではないよ、ということを歌っているのではないかと思いました。またこの「イマジン」は9.11の後に9月21日に行われた追悼コンサートで、歌手のニール・ヤングにより歌われたそうです。

また、9.11に関連して、事件後、アメリカの大手ラジオ局によって作成された「不適切リスト」の中に、「イマジン」が含まれていたことが調査の結果が分かりました。その「不適切リスト」の中には、ジョン・レノンの「イマジン」の他に、メタリカの「シーク・アンド・デストロイ」や、シュガー・レイの「フライ」などが含まれていました。それらを大別すると、単純に物騒な曲——例えば死やそれに類するようなものを連想させるような曲——、また、9.11ないし事件にまつわる要素、たとえば飛行機などを連想させる曲、そして賛成・反対にかかわらず戦争を連想させるような曲、というふうに大別できたかなという感じです。

このことから、テロの影響が色濃く残る中で、テロ自体を思い

出させないこと、また戦争を連想させない、つまりテロが戦争に繋がってしまうのではないかと、人びとに考えさせないことが目的とされた「不適切リスト」の作成だと考えられます。同時に、そんな社会の中で追悼コンサートで歌われた「イマジン」が、どれだけ人々に望まれていたのかも示していると考えました。

宮坂 私はビリー・ホリデイによる「奇妙な果実」という楽曲について調べました。彼女が歌った「奇妙な果実」は1939年に発表され、黒人差別、とりわけリンチという残酷な現実を告発した、当時としては非常に斬新な曲でした。それまで主にエンターテインメントとして受け取られていたジャズというジャンルに、初めて強い政治的・社会的メッセージを持ち込んだ作品だといえます。ビリー・ホリデイは、サラ・ヴォーンやエラ・フィッツジェラルドと並ぶ、女性のジャズシンガー御三家の一人で、当時から高い知名度、人気を誇っていました。その影響は大きく、この曲は後のアメリカにおける公民権運動の先駆けとして語られることも多く、現代においても「ブラック・ライブズ・マター運動」などで度々引用されています。歌は武器になり得るということを象徴する代表的な例であり、誰も語ろうとしなかった真実をビリー・ホリデイは命を懸けて歌にしたのです。

後藤 また、今は、平和と音楽が結びつく事例として、慶応義塾大学の大学交響楽団から演奏曲をいただきました。それにより、戦中や戦後の演奏の傾向を知ることができ、平和と音楽に対する当時の民衆の考えが分かるのではないかと思います。また、先ほど説明したそれぞれの探究をしていく中で、それぞれの探究の共通点を見つけ出し、自分たちの問いの答えに近づいていきたいと思っています。

これからの見通しとしては、自分たちのテーマである「音楽は世界を平和にするのか」を検証するため、自分たちの調査や考察をしていきます。それとともに、「音楽は世界を平和にするのか」という問いを様々な側面から見ていくことを意識していきたいです。

最後に、自分たちにとって探究とは、「自分たちが思った疑問に対して調査、そしてその解決を図ろうとする。そうして新しい疑問が出てくる」、このサイクルである、と考えています。今回は様々な人がいるので、今回を機に様々な意見を聞き、新たな疑問を出していきたいです。

以上で発表を終わります。

〔会場拍手〕

山崎 では質疑応答に移りたいと思いますが、質疑応答も含めて、探究科ではプレゼンと伺っています。なので、皆さんから積極的に問いを深められるような質疑応答をしてもらえるといいんですけども、どうでしょうか。

藤田 皆さんから質問をお受けしたいと思うので、何でも聞いていただいて構いません。

参加者 1 (学生) ご発表ありがとうございます。高校生なのに、こんなに頑張っていて、私もそろそろ卒論とかが近づくので、見習って頑張ろうと思いました。音楽が平和をもたらすとか、平和じゃなくしてしまうかもしれないという部分で、私は音楽を、もしかしたら平和を壊しちゃう可能性があるかもなと思っていて。最近、スポティファイというアプリで、戦争で銃を使って人を撃

つ音が音楽として配信された、ということがありました。興味本位で聞く人もいるし、それを聞いて傷つく人もいるかもしれない——そういう当時のことを思い出して傷つく人もいるかもしれない——し、面白くて実際に聞いてみたいという考えを持ってしまふ人もいるかもしれない。もしかしたら、音楽というものは、平和だけではなくて、怖いものを生んでしまうのではないか、と思いました。〔質問というよりは〕コメントかもしれないです。

藤田 ありがとうございます。まさに僕らもやっていることはそれでして、最初の〔ブルックナーの〕補筆の部分から展開して、「音楽と平和」ということをやり始めたというときに、まさにそういうお話が出てきたわけです。そこからやはり今手軽に、さっきおっしゃった通りスポティファイやアマゾン・ミュージック、YouTube などでも手軽に音楽が聴ける時代になって〔いるわけですが〕、そうした音楽が悪用されて、人々の士気を高め、戦争の時代に突入していたという歴史を知ってもらうことこそが、反戦意識の向上に役立つのではないかと考えて、私たちはこの探究を始めたので、その指摘は大変ありがたいです。ありがとうございます。

参加者2（市民） ピックアップしていただいた音楽はすべて歌詞がある音楽だと思うんですけど、僕は個人の平和な時間と考えたときには歌詞がない音楽のほうがさきに連想されました。そこで、メッセージ性の強い歌詞がある音楽をピックアップした経緯とか理由があれば教えてほしいです。

藤田 ありがとうございます。一番最初は、ご指摘のとおり、クラシック音楽に絞って探究を進めていました。しかしながら、ク

ラシック音楽といっても、いろんなジャンル、時代の音楽があって、一概に戦争という面で結びつけることができない曲もあるわけですね。その中で、こうして今出ているように「奇妙な果実」など人種差別を批判するという意図で作られた曲などもあって、そうした方が自分たちの探究の趣旨に沿うという意味もあって、ここも入れています。

今回の発表では触れなかったんですけど、このそれぞれの探究というところではシベリウスの作った「フィンランディア」という曲を取り上げています。その曲は今フィンランドで第二の国歌と言われるほど有名というか、第一次世界大戦からフィンランドを守った曲という認識をフィンランドの方々はしているようで、そういった面でもやっぱりご指摘のとおり、歌詞のない曲というものから、今はそれぞれの探究というところでメインでここできているわけであって、あくまでも僕らの主たる探究の内容というのは、クラシック音楽と平和の関係についてですので、〔今回歌詞のある曲を多く取り上げている〕意図は、ちょっと分かりやすさを求めるという感じ、という認識で大丈夫だと思います。ありがとうございます。

参加者3（市民） 質問させていただきたいのですが、ヒトラーはちょっと平和とはほど遠い、ちょっと逆を行くような人物かなと思うんですが。あと、「ヒトラーと音楽」の時点では、ヒトラーはまた音楽に結びつかない……〔その結びつきが〕あまり一般的には知られていない部分なのかなと思うんですが、なぜこのテーマにヒトラーを掲げたのか伺いたいと思います。

藤田 はい、ありがとうございます。一番最初のこの図を見ていただければ分かるように、まずは音楽というところを主たるテー

マとして掲げて集まったのがこの班です。そこから補筆というところに向かっていったんですけど、ここは発表の中でも申し上げたとおり、アナリーゼという大変専門的な知識が必要になってくるので、それは断念しました。音楽に絡めてどうしても探究をしたいとなった時に、この一高では SDGs というところを絡めて探究をしなければならないので、その 17 つある中で、16 番目が「平和をすべての人々に」というものになっているので、そういう意味で平和というものを持ってきました。

そこで音楽と平和を探究するといったときに、何を事象として挙げて、そこを深掘りしていけばいいのか、どうすれば音楽は世界を平和にするのかということ考えたときに、僕らとしては反例を考えた上で、逆をとれば音楽は世界を平和にするのではないかという、そういう思考プロセスがあって、戦争と音楽を考えました。

わずか 80 年ほど前にいたヒトラーが、平和の反対として、一番最初に僕らの中では出てきたものですから、そこでヒトラーと音楽の関係を調べていく中で、ヒトラーは第一次世界大戦に従軍した後、貧乏な学生ながら家具を売ったりしながら歌劇場に通ったりだとか、総統に就任した後も御前演奏会で「第九」を演奏させるとか、とにかくヒトラーはクラシック音楽、特にドイツ音楽が大好きだった人物だと分かりました。そういったヒトラーと音楽、そしてヒトラーと音楽の中でも、ゲッベルスという戦争のプロパガンダの宣伝大臣の事象とかも考えつつやってみれば、その反例が出てくるのではないかということで、まずはヒトラーに注目したという形です。ありがとうございます。

参加者 4 (学生) 発表ありがとうございました。僕からの質問は、この音楽と平和というテーマで進めていくにあたって、耳が

聞こえない人々、聴覚障がい者の人々にとって、音楽はどうなるのかと感じて。聴覚障がい者の人々はこの議論から外れてしまうのかなと思いましたが、皆さんにとって聴覚障がい者は音楽を感じることができると思いますか？

藤田 ありがとうございます。これはちょっと僕らまだやってないので、一人一人今から答えるのか、僕だけかもしれないんですけど〔答えたいと思います〕。僕としては、耳も聞こえない人も音楽を感じることができると思います。それはなぜかと言いますと、僕らの探究の内容とはちょっと違うんですけど、歌詞から音楽を連想するということは、去年の音楽の授業の中でもやりました。歴史の授業の中でも、この資料にリズムをつけるとしたらどういうものかという——仮定ですから、耳が聞こえない場合はちょっと別かもしれないんですけど——音楽というものがわからない中でも音楽を連想するということは、僕らの経験としてはできました。なので、そういったものからも耳の聞こえない方でも音楽を感じることはできると僕は思います。

飯野 自分が耳が聞こえなくなった状態は、感じたことがないからあまり分からないんですけど、たとえば劇場に行ったりすると、音楽を聴く前から空気感が伝わるといえるか、何か独特の空気感があると思うんですよ。音楽を聴く場所の空気感とか、聴いている人の雰囲気とか、そういう音楽からつながって、広がる影響の中で、耳が聞こえないながらも音楽を——間接的にはあるんですけど——体感できたりする可能性もあるのではないかなと思って。だから直接的に耳から聞くことはできなくても、音楽を味わうといえるか、体感することは可能なんではないかなと思います。それで周りの人が例えば穏やかになったり、逆にすごい荒っぽくなっ

ちゃったら、それは多分耳が聞こえなくてもその雰囲気、空気感が伝わってくると思うので、平和とも関わらせることはできるのではないか……そう思います。

参加者 5 (学生) 発表ありがとうございました。最後のほうの、今後の課題のところ、音楽や映画の定義などを考えていきたいということは大切なことだなと思って聞いていました。何となく戦争という言葉が出てくると、聞いている側としては定義付けとまでは行かなくても、割と関係性〔で考えられる〕というか、戦争がない世界というのも一つの平和だと思うので、平和の定義というのは何となく連想できるんですけど、個人的には音楽をどのように定義するのか、とても難しいと思って。根幹である問題意識は「音楽は世界を平和にしているのか」だったと思うんですけど、私には信念とか、個々人でとか、曲によってとかで違うものかなと思って。どんな音楽かをかなり絞らないと、論じていくことが難しそうだなと思いました。

音楽が世界を平和にしていたという事例的なものを、エピソード的に話させてください。私はコーラス部だったので、コーラスの語源を調べたことがありまして。古代ギリシアで、かつて国家という枠組みができたとき、身分の差があっても一つの国家として成り立たせていく過程で、一つの演劇とか音楽とかそういうものを、理論が違っても同じものを見て、それで感動するとか楽しいとか悲しいとかそういう感情を共有することによって、国家として枠組みを保っていたそうです。そういうことで、理論が違ってもバランスのとれた平和な国家というのを作ろうとしていたという語源があるということがあって。それを高校の時に知ったときに、音楽は世界を平和にするんだなあ〜って、私は思ったんですね。私の中では、音楽の中でもコーラスは世界を平和にする

のではないかとと思っています。どの音楽が平和に結びつくのかというので、そこで定義づけを具体的にしていく必要があるなど感じました。すみません、コメントになってしまいました。

| 18

藤田 音楽というものをきちんと定義するべきだろうというコメントだったと思うんですけど、まさしく僕らもそう思っていて、いま平和というものだけを定義したんですが、後で映るかもしれないんですけど、先ほど〔事前の打ち合わせのときに〕今の疑問を山崎先生の研究室で書き出した時にも「音楽とは何か」という疑問がやっぱり出てきました。そのところをきちんと詰めた上で、もう少し平和とは何か、音楽とは何ぞやということを中心にやっていくと、もうちょっときちんと論理だったものになると思うので、きちんとやっていきたいと思います。ありがとうございます。

参加者6（県立大教員） 非常に面白かったです、ありがとうございます。私はそういう違う概念や違う次元を利用していろいろ比較することが大好きなことなんですけど、平和と音楽の関連性や定義を見るとするのは非常に面白いです。どういうものを平和というのかが、まず一番気になりまして。さっき音楽の例でおっしゃったのは、例えば差別ということだったり、あるいは「演奏がない」ということだったりするわけですが、こういうことが平和の対義語になるのでしょうか。なので、平和ってどういうものなのか、まずこれを今の段階でどのくらい皆さん、探究をされたのか〔を聞きたいです〕。

藤田 ありがとうございます。ここに書いてある通り、今年の4月ぐらいにこうした形で、一旦の〈僕らの平和〉というものを定

次の発表、いろいろと楽しみにしていますので、よろしくお願
いします。

| 20 藤田 ありがとうございます。

山崎 よろしいでしょうか。後で最後、全体討論でまた皆さんか
らも質問をお受けしたいと思います。

私から今回の発表者の皆さんに直前でリクエスト 2 つ出して
いました。

1 つは、問いを書き出して、ということでしたね。それは今ち
よっと置いて、後でまた全体討論の前に一回見せてもらえれ
ばと思います。つまり、「問いはどのように深まったのか」と
いうことを、ちょっと具体的な例で見たいと思います。も
う一つ、これは今できればちょっとお答えもしてほしいんですけ
れども……。きれいな発表、素晴らしいです。でももうちょっと
泥臭いところを見せたい。先ほどのリクエストですね、困ったこ
ととか、個々に悩んだこととか、もしあれば教えてください。

飯野 個人的には、最初にやった平和の定義についてのところな
んですけど、この6人の中で一回「平和ってなんだと思う？」み
たいなふうに挙げていったんですけど、それでもすごい違うとこ
ろもあればちょっと似通ったようなところもあって、本当に人
それぞれすごい平和が違うんだなって思っ。一応現状でこうい
うふうに、定義というか定めてはいるんですけど、その個人として
考える平和な状態っていうのを、どれほど……違いがありすぎて、
それを集めていくことすらすごい難しいことだなと思って。個人
的に、その時から「平和って何なんだろうな」というのがわけ
わかんなくなっちゃって。そこがすごい悩んでますね。平和につ

いてもっといっぱい意見聞きたいかなと思ってます。

宮坂 私は問いがやっぱり大きすぎると考えるのがまとまらないなっていうのは思いました。飯野君とちょっとかぶっちゃうんですけど、やっぱり一人一人意見があって、一人一人たくさん意見があって、さらにそれが6人いると、さらにアイデアという考えが広がっていっちゃって、やっぱり答えに行き着かないなっていうのはあるので、先ほど先生方にも指摘はされたのですが、問いは大き過ぎないほうがいいかなと思いました。

| 21

後藤 自分たちが探究するのが、だいたい高3の一学期くらいでケリをつけるみたいなかたちなんですけど、それに間に合うのかなという不安があって。一時期迷走していた時期があって、その時うちの班は大丈夫なのかなと思って。今はなんとかなってるかなとは思ってるんですけど、そこはちょっと不安に思ったことがありました。

藤田 自分もこの、いわば迷走期のときに、いろんな話をしている中で、イデオロギーの対立が起きたときに、どうやって解決すればいいのかなという——戦争反対という人もいれば、もっと戦争をやれという人たちもいるし、軍事力反対という人もいれば、もっと軍事を持てとか——そういうイデオロギーの対立が起こったときに、どうやって対処をしていけばいいのかなって。相手をねじ伏せるだけだったら、それこそ平和じゃないし、どうやって平和的に言葉で解決すればいいのかなというのは、すごい疑問に思ったし困ったことです。

荒井 探究のテーマが大きいというのもあって、やっぱり様々な

側面から物事を見ないといけないので、今やっていることは、一つのものに対して様々な視点から見ることで、それが先に進んでいるのかというと、あまり進んでいないような気がして、やっぱりこの期間で終わるのかなという不安は結構あります。

山崎 はい、どうもありがとうございます。発表者の皆さん、どうもありがとうございました。

〔会場拍手〕

山崎 ではつぎのフェーズに移りたいと思います。

この後は、スケジュール的には座談会ということで、その後、全体討論という流れです。座談会では、こちらの教員が今の発表を、そして質疑応答を受けてそれぞれ考えたことを、あとちょっと我々で話させていただきます。合わせて、交互に考えることを数分ずつお話しさせていただくような、そんな流れになります。

一つ、その前に付け加えておきたいんですが、冒頭ちょっと言い忘れました。この〈探究の探究〉を始めるきっかけなんですけれども、高校の先生とお話をしてですね。私、招かれて高校の発表を今日みたいな感じで聞いたんですね。最初、私は皆さんが中学生だと思っていたので、なんてすごい、と。でも高校生だと思ってすごい。そのすごさを考えたときに、ある意味ちょっとすごすぎて、マシーンみたいだなと。これは発表がうまいな、でもあまりに機械的すぎないかと思ったんですね。そこが最初の企画で、それを高校の先生にお話ししたら、「実はそこで悩んでいるんです」と返ってきた。メソッド（方法）はある、もうプレゼン・テクニクもバッチリ。もしかしたら大学生より、我々（教員）よりうまいかもしれない。「でも何かが、何かが足りないと思い

ませんか？」というところの声から、あるいは疑問から、あるいはモヤモヤから始まっているんですね。そこはどうやら先生方も共有されていると思ひまして。プレゼンがうまくできればいい、うまく話せればいい、わけではない何かとは何なんだろう、というところのつながりで、ちょっとモヤモヤを話していただいたんです。

ということを、添えながら、ぜひ僕が今度、先生方どう思うか、我々も一緒にお話をしていきたいと思ひます。では、代表の橋爪先生にお話をさせていただきます。

橋爪 最近はこの企画は、我々企画サイドがすこし忙しすぎてあまり事前に整えて挑むことができなくなり、割とアドリブに喋っているところが若干あるというところがあって、取りまとめが効かないところがあるかもしれません。なのでダラダラと喋ってしまうかもしれません。

まずは、甲府第一高校の皆さん、発表ありがとうございます。すごく面白く聞かせてもらいました。面白く聞かせてもらいましたと言いながら、先ほどご本人の皆さんの発表の中にもあった通り、我々は事前にいちど聞かせていただいているとか、実はこの直前のところでも少し、ちょっとリハーサルをやってみようか、みたいな感じで聞かせてもらっているということがあったんですけど、やっぱりこういう形でやってもらうと全然違うなというふう思ったところがあります。

それとプラス、いま山崎先生が事前に仕込んでいたことで、「あまりにもきれいすぎる、泥臭いところを見せてほしい」というようなフリがあったと聞きましたけれど、それが個人的にはフィンプレーという感じでした。最後のところで困ったことをお話ししている部分というのが、個人的にはすごく響いたところがあり

ました。お一人お一人が自分の言葉で語っていることが。

今から私が話す感想は、抽象的なレベルの話で言うとメタレベルとオブジェクトレベルの話というか、〈探究って何ですか〉という抽象的な次元と、皆さんが実際にやってくれた発表の内容についての次元というのが、ないまぜになったような感想です。

これも舞台裏の打ち明け話みたいな話をしてしまうんですけど、さっき、あるいはこのあいだも聞かせていただいて、やっぱり聞いて適切なサイズというのがあるよね、という話題がしばしば出たんです。これは例えば、あのいま実はこの教室には、我々のゼミ生も一部いたりとかして、卒論書いたばかりとか、これから提出しますみたいな人もいたりするので、そうした皆さんを指導するときにも言うことなんですけど。最初に出せる聞いてすぐ大きくなっちゃうんですよ、我々の目から見ると。でも、最初にはじめて問いを立ててみた人からすると、そういうことはなかなか見えてこない。だから、音楽は……えーっと……世界を平和にする、だっけ？ 厳密にいうとなんだっけ、音楽は……

藤田 世界を平和にする。

橋爪 ……という問いを立てたというのを聞いたときに、その聞いてちょっとやっぱり……ちょっと大きすぎるんじゃない？ という感想を一旦は抱いてしまうというのは職業病としてあるんです。だけど、さっき上の研究室で相談したときに、そういう意見をおっしゃる先生もいたんだけど、ぼくもあまのじゃくなどころがあるので「音楽が世界を平和にするかどうか、気になるよね！」とも思っちゃうところがある。確かに、そう問うた時に、その問い自体が我々をつまづかせてしまう可能性はあるんだけど、でもなんていうのかなあ、皆さんが自分の生きてきた経験の

中から、ある意味、音楽というものへの関心と、平和というものへの関心があって、その中でさきほどの問いをいわば“弾き出した”んだと思うんですね。それが皆さんにとっては問う価値のあるポイントとして立ち上がってきた。もちろん、具体的にちゃんと答える、きれいに答えるためには、答えられるような問いにした方がいいし、多分そういうふうにしていくのかなとは思いますが、「音楽が世界を平和にするのか、それがすごい気になります」ということが皆さんの真実の問いだとするならば、その問いはその問いでとても価値があるなというふうには思いました。

その時に、皆さんは音楽は平和にするのかということを考える、平和ってなんだということを考える。私がかちょっと聞いてて思ったのは、平和について何かっていうことをお互いに議論するっていうこと、しかも先ほど藤田さんがおっしゃってくださったように、相手をねじ伏せるんじゃなくて、言葉で考える。違う考えがあっても、言葉で説得することを試みる。この平和について考えるというその営み自体がある種、平和ということのパフォーマティブに実践していることでもあるなというふうには思ったんです。つまり、実は皆さんが言葉を駆使してお互いに議論しながら、そしてこういうふうな形で発表としてまとめて、平和というのはこういうことではないかと思いました、という皆さんなりの平和の概念以上に、実は皆さんの探究の営み自体がある種の実演になっているということもあったりするかもしれない。我々は自分の頭で考えて、言葉でこねくり回したり、文字にして書いていること以上に、自分がやっていることがそういうことを実現していたりすることもあったりする。

もう少しだけ話しますが、探究ということをご皆さんと考えようということなので、我々も一応プロなので文献などを斜め読みぐ

らいはしてみたりしたわけです。その中でもこんな見解に触れている人がいて。それは、私たちが生きている社会って民主主義でやっている社会。で、民主主義でやっている社会の中で、探究と
いうことをみんなでするというのは、とても重要なことではないかということを行っている人がいるんですね。つまり、私たちは言葉で、物事を見て、その中で議論をする。議論してものを決めるというのは、何が事実かということを引きちと見極めるとともに、だけどころんな価値観や意見を持っている人もいるという、そこを引きちと腑分けした上で、言葉で解決していこうという営みなんです。それはまさに、探究するという時に、皆さんが何を、何が皆さんに大切かということをつづいた形で、現実というものを引きちと見極めようという、そういう営みを今しているという。それ自体がある意味で、我々が生きる社会の在り方みたいなものと、すごく連動していることをやっているなというふうに思いました。

そのことが、皆さんが平和というのを考えている間にすごく浮き彫りになるのかなというのが、私が今日の皆さんの話を聞いて抱いた感想です。それは、たまたま皆さんのテーマ〔平和〕を考えるのが、〈探究と何を何か〉というのを考えるうえで、すごく、なんて言うか、有利なテーマということです。「有利な」というのは、僕とか、探究とは何かを探究している我々からすると有利なテーマになるかなと思えるということなんですけど。皆さんいろいろ苦勞もあると思うんですが、とても重要な題材やっているなと思ったというのが、私の感想です。ということで、だ
いぶしゃべっちゃいましたね。

山崎 どうもありがとうございます。座談会というよりも講演会です。座談会なので、先生方にご意見があれば、反応してくださ

い。

森下翔（以下、森下） ありがとうございます。橋爪先生が喋る直前まで、ああ、私しゃべらないといけないんだな、と忘れていた感じなんですけど。すごい素敵な発表だったと思います。この会を企画していただいて、みんなでどんな会にしましょうかという話をするにあたって、私から一つ注文をさせていただいたのは、会話の時間を取ることです。始めに皆さんに喋っていただいて、その後、教員が座談会にして、全体と話し合うという形を考えていたのですが、その形を形通りに捉えてしまうと、皆さんは皆さんで喋って、私たちは私たちが喋って、フロアから質問を受けるという形になりそう——形式的にはなりそうなので、なるべく話し合ったり、発表した後に——さきほど困ったことを話してもらいましたけど——話し合うというフェーズを作りたいということを。それはやっぱり、じぶんでいうのもなんなんですけど、まず提案してよかったなと私は思っていることで。

やっぱりそれが先ほど少しね、イデオロギーの対立の中でどうやって対話を成り立たせるのかとか、解決というような言い方をしていたような気がしますけれども、問題を解決するにはどうしたらいいかというようなことを言っていたと思いますが、対話というものの力だと思っています。それは人が他の人と話し合うということを通じて自分の考えを深めていく、そういうことが人間の基本的な思考のプロセスとしてあると私は思っていて、それをやっているということなんだと思います。その中で——ご覧の通り、橋爪先生がとりとめがないと言って、私も考えながらしゃべっているんですが——その中でね、答えが出なくてもいいし、解決する建設的な提案が出なくてもいい。もっと大事なことがあって、それは人が言っていることを真剣に聞くことだと思ってい

るんです。相手が、特に質疑応答なんかがあると、人が何かを話している。それに対して、発表者って、身構えちゃうじゃないですか。自分たちが発表をこうやってしていて、どういうつもりで発表したかわからないですけど、とりあえず完璧に準備して、完璧に発表したというふうに、一応見せないといけない。自分がここでそういうふうに立派な発表をする人間として見られているし、そういうふうな振る舞いをしなきゃいけないというふうに強く思っていると、「戦い」になっちゃうんですよ。相手の質問に対して自分がどう答えるかっていうのが、相手に対して完璧な答えを与えとか、相手の言っていることにたいして相手に「なるほど」と思わせたいとか、欲求も出てきたりして、相手に対して気の利いたことを言いたくなったりしてしまう。

だけど、私は、質疑応答を含めた対話において最も重要なのは、相手が言っていることの中に「そうだな」と思うことを見つけることだと思っていて。相手が自分とは異なる視点を持っていて、その異なる視点から自分の話を聞いて「こういうふうに思った」と言ってくれていることに対して、「ああ、気づかなかった」と。その感覚をすごく大切にしてほしいというふうに私は考えています。そういう意味では質疑も発表のスキルの一部なんです。人の話を聞きながら、自分がそれを受け身で構えて、それを聞きながら自分の考えを深めていくプロセスの一部として、相手の異なる視点を受けていくという。それこそが、質疑における重要なポイントの一つだと思っていて、なので、発表するというのを鍛えたり、内容を固めてやるということと合わせて、人と話す、質疑を含めた人との対話のやり方みたいなものをぜひこういう場で学びながら、探究を深める過程にしようとしたというふうに思いました、という感想です。すみません、長くなりました。

橋本 前に座らせて聴かせていくって感じが申し訳ないなと思っています。紙とか鉛筆は取りますか？ このあと全体討論に移行しますよね。もし書く物があった方がいいとか、何か準備したいなってのがあったら、いま準備してもいいかなと思っています。 | 29

〔生徒たち、紙や筆記用具を取りに行く。〕

橋本 集団で探究することの難しさというのを、非常に強く感じたというのが、大きな感想でした。例えば社会の中で他者と探究することが大事じゃないかという話も出てきたんだけど、探究って出発は個人でなければいけないのかなというふうに私は思っていて、だからその集団での難しさを強く感じることになりました。探究っていうか研究っていうか——どちらでもいいかなと思うんだけど——問題意識が重要だと思っています。自分の問題意識、問題関心、何をどうしたいと思っているのかとか、何に怒りを感じているのかとか、何に悲しみを感じているのかとか、そういうことがすごく大事で、そこから探究なり、研究なりをスタートするのがいいのかなと思っているんです。それは、もしかしたら自分だけの勝手な思い込みだったりもするかもしれないんだけど、でもそれが大事で、それを突き詰めていく、自分だけの問題意識を突き詰めていく中で、どこかで世界と繋がったり、他者と出会ったりすると思うんです。逆に言うと、自分だけの問題意識を突き詰めない限り、他者と出会うことはないし、世界と接続することも多分ないと思うんですよ。だからこそ、自分の問題意識を大事にしてもらいたいんだけど、でも集団で探究しなければいけないということもあって、ここにも難しさがあるというか。意見がみんなバラバラになってしまってどうしようという話とかもさっき出てきたと思うんだけど、そういう難しさはやっぱり

あるんだなというふうに思いました。来年の1学期までに形にしないといけないという話がありましたが、今言ったようなことはすべてを実践することは難しいと思っています、せっかく「音楽は世界を平和にするのか」という問いを立てたのだから、それをどう自分に引き受けるか、それを自分として受け止めようとした時に、どういう具体的な問いになるのか、ということをごひ考えてほしいなというふうに思っています。

「音楽は世界を平和にするのか」という、そのままの問いにはたぶん答えられないと思うので、それは大きな問題意識として、集団としての探究の問題意識として、それは自分はどのようなふうを受け止めるのか、自分にとっての具体的な問いってなんなのか、というところを、さっき言った自分なりの問題意識にできれば結びつけて立ててほしい。自分の問いを立ててほしい、自分の問いを。みんなの問い、誰かの立てた問いじゃなくて、自分の問いに取り組んでもらいたいと思っています、残りの時間——あんまり残されていないかもしれないけれども——できるだけ自分の問いに近づいてって、その問いに答えるということができたらいいかなと思っています。うまく答えられなくてもいいと思うんですけど、さっき森下先生が答えや解決策がでなくてもいいんじゃないかといっていて、私もここはそういうふうに思っております。問いのほうが大事です、問い。自分にしか立てられない、自分の問いを立てることが大事だと思うので、そこに行けばいいのかなと。あとは粗削りでも何でも、なんとかして論じるということをやってみることができたらいいのかなと思っています。短くまとめました。

山崎 私も手短に。今回の企画には2つテーマがあって、その点がわかりにくさを生んでいます。1つは、今回発表いただいた探

究の「内容」に関する話。もう1つは、「探究とは何か」「探究を探究する」。これが両方重なっているのでよくわからないところがあるんですけど、まず内容をよくわからないと話ができないので、そういうところから徐々にですね、探究とは何かというところに移っているのかなと思います。ある種、その後者はメタな次元に入ってきているんですけども、さらっとその観点でお伝えしたいことがあります。

哲学イベントなので、哲学者をちょっと紹介します。国家という話がありましたね。プラトンという人は[『国家』という著書のなかで]こう言っています。身体の運動は強制された場合でも身体に害を及ぼさない。しかし、強制によって獲得された知識は心に残らない。教師に、ちょっと言いたい言葉な感じがしますけれども。

さて、知識とは何か。こういった時、伝統的な哲学の見解というのは、このように、要するに正当化される真である信念、これを知識と言うんだ、というもの。定義ですね。こういうところから延々と始まっています。

で、「グティア問題」というのが出ました。今何時か。たまたま時計を見たら、これでやっぱりこの時間だよ。例えばの時間ですが、7時10分、こういう時計を見て、これは合っていると。ちょっと実際ズレてますけど。ただし、これは実際その時間だったってことであれば正しいわけです。けれども、それが実は時計が止まっていたという場合、結局それ〔時計の時刻が正しかったこと〕はたまたま幸運で、その知識を持っているように見えたけど、そうとは言えないねという事例を出したグティアさんという哲学者がいて、これが知識論に非常に影響を及ぼしたんですね。じゃあどうするかといったときに、信頼性の高い仕方でも獲得される真なる信念というものを考えようということになった。

さっき幸運って話をしました。要するに、これが真なる信念であるかといったときに、例えばコインを投げて天気を当てるのと変わらない。あるいは、いたずらする。この時計の後ろに誰かが、悪さするデーモンみたいな人がいて、見る瞬間だけ合わせるんだけど、それ以外は止まっていたり、時計を変えたりすると。悪運の影響——壊れているとか——、温度計でもそうですが、そんな影響もある。

そこでの問題はですね、ここに言ったように信頼性の高い仕方といっても、これが世界の側になると後ろに悪さする悪い奴がいるかもしれないということ。そこは、この信頼性を重んじる主義を取ったとしても、解決されない問題だと。

それに対してですね、コインで天気を当てるのに対して、気象予報士の提供をする知識というものが、一つ参考になる。そこで信頼性を考えるときに、皆さん、例えば探究をするプロセスという非常に大事とされると思うんですけども、その中で欺かれる可能性は多々ある。たまたま真実っぽい知識が得られたとしても、「たまたまじゃない？」と言われることへどう反論するか。

その一つのアプローチとして、行為者に特有の性質を見ようと。端的に言えば、「徳」ですね。真理を獲得するのに適した行為者の側の、たとえば性格特性に注目しよう。例えば、知的誠実さ。誤りを起こさないように慎重であり、あらゆる利用可能な証拠を考慮する行為者といった、生徒さんそれぞれの特性ですね。これは世界の側に欺かれるものとは違う性質としてあるわけです。それと、誠実な仕方で信念を形成する生徒さんは、誠実でない生徒さんの態度よりも、真である信念を形成する確率が高いものとして導かれる可能性がある。

そういった探究者の徳というところを、一つ観点として出す。具体的には、例えば注意深さ（ケアフルネス）とか。あるいは誠実

さと謙虚さとか、あるいは打って出るような勇気とか、いろいろあるわけですが。先ほど他者という話がほかの先生方からもありましたが、この点について言えば、新しい情報とか異なる考えを持つ人に対する柔軟性、オープンネスというものを探究者であるあなたは持っているか。これは一種スキルの獲得と同じく、探究の活動、プロセスそのものではなく、そこで得られる素質、特性、こういったものを実は磨いていることが、探究の本質的要素なんじゃないかと。

で、その先に、プラトンを出したので最後アリストテレス。「あらゆる人は、本性上を知ることを求める」(『形而上学』)。こんな哲学者も、こんなことを言っている哲学者もおります。今日は、徳という性質にちょっと触れておきたいと思い、話しました。私からは以上です。

では、これらを受けてですね、また先生方とフロアと生徒さん、みなさんに合わせてですね、一緒にお話を聞ければと思います。では、先生方から、質問があればお互いに。

橋爪 お互いのコメントというところも含みつつ、せっかく来ていただいたんで、皆さんの発表と結びつける形でコメントしたいなと思ったんですけど。森下先生や橋本先生のコメントから出てきた、聞くっていうことの重要性という点があったと思うんですよ。それは僕は本当にそう思って。今日一つ、さっきフロアから皆さんに来た質問で、特に印象深い質問が僕はあって。それは何かというと、聴覚障がいを持った方にとって、音楽と平和っていう問題はどういう形で受け止められるのかという質問があったと思うんですね。それはひとまず答えることはできていて、お答えになっていたんですけど、個人的にはもっとうろたえてもいい質問かなという気がしたんですね。やっぱりそれは多分、ある種

意表をつく問いだったのかなというふうに、私は思っただけ。私は少なくとも意表をつかれて。

音楽が平和を生み出すにしても、生み出さないにしても、音楽と平和あるいは音楽についてどんどん考えるということ、その中に排除性みたいなものがあるかもしれないという観点は、発表の中にはおそらくなかった。もちろん皆さんの発表はすごく周到に作られていたので、平和ってことを考えるうえでは、戦争ってことだけじゃダメなんだ、という——差別もそこにはありうるし、差別があったらそれは平和とは言えないね、という——観点も皆さんの発表のなかにはあると思うんですよね。だから「奇妙な果実」の話とかもあつたし、というふうに思うんですけど、さきほどの問いは皆さんの考察していた前提の部分を問うような問いでもあつたのかなと思っただけ。

それに対して的確に回答するというのも、さっきの山崎先生の発表で言うと、それもある種の徳ではあります（徳というのは馴染みのない日本語なので、優れた性質ぐらいに思ってください）。知識を探究する上では、ある種の優れた性質っていうものを私たちに身につけうるだろう、というのが山崎先生のさっきの話だと思うんですけど、その優れた性質というのは、もしかしたらうまく答えられることよりもむしろ、何かそこでうろたえること、意表をつかれたことに対して、素直なりアクションすることなのかもな、というようなこともちょっと思いました。

森下 ありがとうございます。そういう形でお話してくれると大変ありがたくて。もっと具体的に言うと、質問された時に、「そんなこと考えても見なかったです」とか、「ちょっと今、大事な問題提起だと思うんですけども、今までそんなことを考えたことがあまりなかったので、この場では簡単にちょっと答えること

ができなさそうなので、また後でお話しさせてください」とか、そういう弱さを見せることですよね。自分たちが発表者なんだけど、全てを知っている存在としてそこに立つんじゃなくて、まだまだ知らないことをたくさん持っている存在として、前に立って発表するということができるようになる。これは、実はすごく難しいことなので。人の話を聞いたときに、それは、そのことを知らなかったという自分の弱さを認めて、自分が完璧ではない、至らない人間であるということを確認ながらそこに立つ、みたいな。でもそれが、探究的プロセスにおけるすごい不可欠なことのひとつだと思っているという話を私は考えている、ということが私がいたかったということです。橋爪先生が、私の言葉にならない部分を広げていただいたので、とても助かりました。

山崎 いろいろなお話が出てきましたが、フロアの皆さんにお聞きしたいと思いますが、まず生徒さん、何か聞きたいことがあれば聞いてみたいんですが、いかがでしょうか。

荒井 質問は、言ってくださった通り、結構意表をつかれたというか、あまり考えていなかった視点で、私もそれに対する意見は持ったんですけど、答えてくれた2人も、自分の意見というものをこの場で発表をして。でもこの探究は、6人でやっているものだから、そのようにまだ分かっていないという部分も見せたらいいかなというふうに思いました。ありがとうございます。

藤田 ありがとうございます。自分は質疑応答をずっとやっていて、わりと答えられなかったことがそんなにないというか、なんとかして答えようとしていたというのがあって、それで知らないから時間くださいというのはあまり言わなかったんですけど。今

日の質問は特に意表を突かれたことが多くて、困ったりしたことも多かったので、もうちょっといろんなことを深めつつ、常に自分のことを疑いながら、この探究を進めていけたらと思います。

後藤 聴覚障がい者の方について質問された時に、自分は全くいい答えが思いつかなかったんですね。それは分からなかったんですけども、その分からなかったことを、今日分からなかったものでそれで終わりじゃなくて、ちょっとそれを頑張ってみてみるというか、今日出てきた疑問を解決していく方向にやっていたら、もっと良い方向に、理論的にはもっとより良くなればなと思いました。

宮坂 自分は質疑・応答が苦手で、即興でものを考えるのが苦手で、それってやっぱりどうしても自分にとって完璧な意見を言わなきゃいけないという使命感に追われているというか、そんな感じがするので、確かにベストな回答を出すべきだとは思んですけど、どうやっても自分は何も知らないし、っていう存在だっていうことを頭に入れていきたいですね。

飯野 意表を突かれるというのは、自分にとってなかった視点であることがほとんどというか、すべてそうだと思うので、楽しいことだなと思いました。それと、質問にされたことに対して、わからないとか、持ち帰らせて欲しいという答えが可能性としてあるのは、やっぱり、探究とか研究だからこそ起こり得るものというか、独特なものだと思っていて。質問するとき、疑問をぶつければ、答えを求めていると思うんですけど、それを一旦わからないとして返して、そこからさらに深めていくというのは、やっぱり探究だからこそできることじゃないかなと思いました。

山崎 ありがとうございます。みなさん、いろいろ考えることがあったように思います。敢えて一つだけちょっと触れると、プロセスは大事、あるいは気づきとか思いがけなさというのは、これはこれで、プロセスの中で大事な要素だと思います。その一方で、一点、やっぱり強調しておきたいのは、それでも「知る」という行為の中に、真理を探究するという対象側の問題も大事で、「本当かな？」という疑問もやっぱりあると思う。何か言われて「あ、違うかもしれない」という対人関係だけでなく、世界の側にある真理というものを一緒に考えるということもある。要するに、自己変容って大事、それはそうなんですけれども、他者も含めて共に、探究者として世界にある真理に向かっていく。このための謙虚さ、これが一つだと思います。そういったことを、「真理」ということを強調しておきます。

さて、それでは、フロアの皆さんから、生徒さんへのコメントとか教員へのコメントとか、よろしければお願いします。〔甲府第一高校の〕先生方も来ていただいているので、よろしければご挨拶いただければと思うんですが。

甲府第一高校 中 教諭 遅刻してすいません。三者懇談しておりました。今日はありがとうございました。生徒たちが一生懸命発表したんじゃないかなと思ってはいるんですけども、ここまでの話の流れが分からないので、何ともコメントできないんですが、すごく私が勉強になりました。ありがとうございました。

甲府第一高校 渡部 教諭 ありがとうございます。今日は本当に感動して、ちょっと。フロアの方のコメント、ご質問や、先生方の話を聞いて、何かもうちょっと涙が。本当に質問していただい

た方、一つひとつすごい内容の濃い質問で、例えば銃の音を音楽として伝えられたとか、聴覚障がい者のこととか、身分を超えて音楽を通して平和をもたらして、一つの国が平和になったという——その一つ一つが、私自身が平和って、かなり固定的に考えていたなど、ちょっと打ち砕かれました。ありがとうございます。すいません、あとはどうぞ。

山崎 先生方、どうもありがとうございます。先生の胸を借りて、生徒さん、覚醒しているんだろうな、というふうに私は思っています。インタラクションかなと思いますが。フロアのみなさん、いかがでしょうか。

参加者7（学生） 3年の1学期までにまとまらないかも、みたいなお話があったと思うんですが、今までのやり取りを踏まえて、やっぱりまとめる必要ってあるのかなっていうのもすごく感じて。ニュアンスの話とかもある中で、一般的にまとまるのってすごく価値があったりとか、「善」側にあると思うんですけど、そのまとまらなかったものにもある価値というのを、すごく再認識して、いい会だったなというふうに思います。ありがとうございます。

橋爪 はい、コメントという感じでしたでしょうか。ありがとうございます。他は、いかがでしょうか。

参加者8（県立大教員） ありがとうございます。とても面白かったです。音楽の話、僕も大好物なので、もっとそっちの話をしたかったなと思ったんですけど、〈探究を探究する〉ほうに割と話がシフトしたなと思いながら聞いていました。コメントさせ

てください。音楽は世界を平和にするのかという問いだと、イエスとかノーとかになるんですけど、もうちょっと豊かに議論するときに、「どのように音楽は世界を平和にするのか」、「なぜ音楽は世界を平和にするのか」とか、そういう why とか how の問いを設けるといいなと思いました。多分音楽って人を結びつけるかどうかって話ですよ、議論したいところっていうのは。音楽そのものがいきなり武器を除去するとかってことはないので、音楽は人を動かすだけです。音楽は人を動かしてその人が平和に繋がる場合もあるし、もしかしたら音楽で駆り立てられて戦争に行く場合もあるっていう話だと思うんですけど、その辺りをうまく実例とかを見ながら掘り下げていけると、すごく広がりそうだなと思いがら聞いていました。ありがとうございます。

橋爪 ありがとうございます。実はですね、あと4分ぐらいで時間が訪れるんですけども、今日は前で素晴らしい発表と、そして質疑もひるまず迎え撃って——迎え撃って、じゃないか——いただいた皆さんなんですが、19時50分までが限界、というふうに伺っております。ちょっといつもこの会は“延長上等”というような感じでやっておるのですが、今回はそれが難しいかなと思っております。ということ言ってるあいだに残り3分くらいになっておりますが、あとお一人ね、どうしてもというのがあれば——といったら即、手が挙がりました。じゃあ、ごく手短にお願ひします。

参加者5 最後、先生の話聞いていて、すごい感動しちゃいました。せっかくだから、生徒側の皆さんが質問するということがあったらいいのではないかと思います。本当に素晴らしい先生が沢山いらっしゃるから、今日という機会を今後に生かすためにも、

聞いて終わりよりも、質問したら……皆さんがそういう機会があったらと思ったんですけど、ダメですかね。あれば何か質問できたらなって。

| 40

橋爪 はい、素敵な提案ありがとうございます。もう時間的に最後なので、前で皆さんからのコメントをいただくみたいな形で締められればという意味で、そのコメントが問いかけという形でもいいんじゃないかなと、今いただいたコメントを聞いて思いました。みなさんの質問に答えられる先生がいるかないかは分からないけど、いたら皆さん、ヒントくれるかもしれないと思うので、特に遠慮することなく。別に質問した内容が誰も分からないことでも、誰も答えられないことでもアリなので、こんなことを聞いても分かんないかもとか、こんなこと聞いちゃダメかもってことは気にしないで、お一人ずつ、今日の感想と質問があれば、一言ずついただければと思います。では、どうぞお願いします。

藤田 ありがとうございます。今日は本当に貴重な機会で、今まで基本的に高校生からしか質問を受けなかったのが、大学生だったりとか大人たちから質問を受けるってことは、これから先どれくらいあるのかなと思うと、本当に貴重な機会でありがたく思っています。最後に質問ですけど、「どんな人が国を治めれば平和になるか」ということを聞きたいです。

後藤 今までやってきた中で、正直、今日が一番緊張した日でした。自分よりも頭が良いと言うか、自分の想定外が来るかもしれない。今日やってみて、なんだろう……正直、発表しているときは、意外といい感じというか、想像よりうまく行って、自分が成長したのかなと思いました。3月にまた、一高で発表するとき

があるので、そのときに、自分が成長できていればいいかなと思いました。

飯野 自分の中で発表するだけじゃなくて、考える時間もあって、いろいろな考えられてよかったと思います。ちょっと時間がかかったかも知れないんですけど、〔質疑応答で出てきた〕銃の音の話になるんですけど。目的として戦争のリアルを伝えるというのが前提であると思うんですけど、欲望を発散させるというか、例えばそういうスポットとか銃が好きの人っていうのは、実際に戦場に出る以外でそれを味わえる方法があると、そこに繋がらなくなると思うんですよ。FPS〔一人称視点の射撃ゲーム〕とかそういう風に発散するツールとしても平和につなげることができるのではないかなと。ちょっとあんまり良くないかもしれないですけど、思って。そのような目的と違って手段はいろいろあるのかなと思います。

質問は一切関係ないんですけど、「平和な状態と争いが存在する状態が共存するのか」というのがすごい気になっていて、何も戦争がないことだけが平和じゃないのかなと思いました。

宮坂 思ったより人数が多くて、事前に聞いた数よりも多かった気がして、だいぶ緊張したんですけど、自分らの言いたいことはしっかり言えたので、質疑応答も藤田君が頑張ってくれたので、探究の発表としてはすごい良かったかなと思います。自分らでも結構難しい問いだと思うので……しっかりまとめるということはできないかもしれないけど、それでもしっかり探究活動が続けていきたいと思います。本日はありがとうございます。

荒井 普段は 6 人だったり探究の顧問の先生方と探究をしてい

るんですけど、やっぱり6人で話し合ったとしても、出てくる案だったりとか側面には限界があったなっていうのを今回の会で感じました。様々な意見をいただいたことで、これをまた持ち帰って、さらによくしていけたらいいなと思います。ありがとうございます。

質問なんですけど、「先生方が考える、この世界の中で一番の平和ってどんな状態ですか」というのを、教えていただきたいです。ありがとうございます。

山崎 一日かけてお答えしたいんですけども、時間がありました。というところで、もう締めます。今日の冒頭に聞きました。「問いは深まりましたか？」もう一回聞きたいんですけど、この会を通して問いは深まりましたか？ これをまた感想で書いていただければと思います。

では今日は先生方を含め、オーディエンス、そして参加者として来ていただいた皆様方、どうもありがとうございました。これで締めたいと思います。ありがとうございました。

〔会場、満場の拍手〕

音楽と平和——探究の概要

2年探究13班（文責：藤田怜也）

（山梨県立甲府第一高校）

我々の班は、「音楽と平和」をテーマとして探究を行ってきた。

芸術の中でも最も身近であると言っても良い音楽と、言葉自体は身近にあるがその詳細は漠然としている平和を結び付け、「音楽は世界を平和にするのか」を問いに置いて活動している。平和と音楽を結びつけ、音楽が平和および社会に与える影響を明らかにすることで、少しでも平和についての見方を広げて身近なものとし、そして音楽についても見直す動機となればよいと考えている。

また、「平和」というものの本当の意味を見つけるための足掛かりならびに、現在「平和」とされているものについて、今一度全ての人が考える機会となることができるはずだ。

まず初めに、大きく「音楽」「平和」「ヒトラー」という三つの章に分け文献調査を行った。これは探究の上での予備知識を得て疑問点を浮き彫りにすることで見通しを立てることが目的である。また、ヒトラーは御前演奏会を開催するなど芸術に傾倒していた面があり、「戦争と平和」「音楽」という両側面から参考例のひとつとして適すると考え、調査の対象とした。

文献調査の後、平和について扱う上で班内での共通認識を得るため、その定義を行った。各々がイメージとして持っている「平

和」についての印象から始まり、安全保障や戦争についての話し合いにまで至った。そして、平和の状態を「個人として考える平和な状態がより多く集まることで、社会全体がより平和に近づく」と置いた。これは帰結主義の中でも功利主義な考え方で、「最大多数の最大幸福」に基づいている。その後、これに当てはまらない「平和」の考え方の場合も考慮して考え直すことになるが、この段階ではこの考えを班の「平和」として置き、探究を進めた。

平和についての話し合いの後は、音楽と平和の結びつきについてを主に考えている。これは現在まで行っていることである。

まず、平和と音楽が結びつく実例として、大学交響楽団の演奏記録を頂き、戦中や戦後の演奏の傾向を考察し、「平和」と「音楽」に対する当時の民衆の考えを導き出した。

また、それぞれの問題意識や興味を基に実際に「平和」と繋がり深いと考えられる曲を一人一人が選び、調査した。

このふたつの「平和」と「音楽」にまつわる調査をすり合わせて共通点を探し、問いの答えに近づいてきた。

これらの探究の成果を、校内での発表や外部コンテスト、そして「探究の探究」での取り組みに参加して発表を行った。

この「探究の探究」というプロジェクトに参加したことで、話し合いや質疑応答から新たな視点を得たり探究の意義を改めて考え直すことができた。特に平和などの、人によって認識が異なり抽象的な話題を扱う私たちは、多くの立場の人からの様々な意見を交えることが重要である。今までも班員や探究顧問、校内での話し合いは多く行ってきたが、さらに多くの発表の機会が必要だと感じた。

今までの取り組みを踏まえ、問いを細分化して解決していき、自分たちだけでは得られなかった新たな視点からも考えて結論を出したい。

探究、そして〈探究の探究〉を経て

甲府第一高校「音楽と平和」班の生徒たち

新たな視点

荒井美乃里

先日の哲学イベント、「探究とはいかなる営みか」を通して、そこで得られた貴重な体験を提供していただけたことに、まず冒頭、感謝を申し上げる。

私たちの班は甲府一高の他の探究班とは異なり、世界規模の社会課題、「音楽は世界を平和にするのか」というテーマを掲げ、「グローバル」な視点から飛び出した活動を行っている。

このテーマは過去に何度も語られ、議論されてきた。世界各地で議論され、そして今このときも、誰かがどこかでこの問いに対して疑問を抱き、解決の糸口を探っているところであろう。

私たちの班はこの、まさしく「世界規模」のテーマに対する問いに答えを作ろうとしている。

それは、音楽は世界を平和にし、そしてまた世界を平和にするのは音楽である、ということを信ずるからである。

私たちのこの（いわば）信念が崩れようと構わない。音楽を愛する者で構成された6名が知恵を絞り、我ら高校生でなければ回答し得ない、新たな視点を国内外に向けて発信をしたい、この一心で活動を行ってきた。

先日のイベントに話を戻すと、わたしはあの機会を通して、普段の活動では得られない視点を見出すことができた。「難聴の人

についてはどう思うか」がその具体例である。

耳が聞こえることが前提(そもそもそれを考えることすらしていなかった)として活動してきた我々からしてみれば、あの質問の回答には頭を悩ませた。あの場では、「耳以外の感覚で音楽を感じることができる」ことをもって、回答としたが、ならば盲目かつ難聴の人に音楽を楽しむことができないのか、(決してそんなことはないと思っているが)もし仮にそうだとしたら、音楽には世界を平和にする力があるといえるのだろうか。わたしたちはそのような疑問、課題に直面した。わたしたちに都合の良い人々を対象としていては、音楽にその力があるのか、本当にその結論で良いのか、そういったことにはっきりと答える事はできない。

平和とは何か。そのことから考え直してみたいと思う。

命題

飯野郁斗

もともと、私は「人間社会の平和とその構築に音楽がどのように影響するのか」という問題意識を持っていた。音楽というものは良くも悪くも人の感情を動かすものだ、と考えていたからだ。プラスとマイナス、そのどちらにもなり得る音楽が、社会を平和にする場合、どのような関わり方をするものなのか、という疑問を持っていた。もちろん逆も然りである。

先日、県立大学主催のイベントに参加した。その中で「そもそも音楽が聞こえない人」という着眼点に気づかされた。思えば、探究を始め、音楽というテーマを立てた当初から、前提の部分「音楽」が横たわっていた。「音楽を体感できない」という可能性を排除してしまっていたのだ。

「音楽には人の心を動かす力がある」。これは私の中では、疑いようのない事実である。音楽を聞いて、感動から涙を流す人は何度か見たことがあるし、私自身音楽を聞いて感動することがあ

るからだ。では音楽を聞くことができない人は？ 音楽を聞けない人は音楽のもつ力を体感できないのだろうか。

私の答えはノーだ。

音楽を「聞く」ことができずとも、周囲の雰囲気などから、音楽を、音楽のもつ力を「感じる」ことは可能だと考える。 | 47

音楽のもつ力は、程度の差はあれど、また言語に違いがあっても、個々人の間で体感し、共有することができるのではないか。これが、私が先日のイベントないしこれまでの探究活動全体を通して至った考えだ。

音楽には人々の心を動かす力がある。

では私たちがすべきことは、できることはなんだろうか。

それは、「音楽の力を良い方向に働かせること」だと考える。

それを怠ると、どんなに人々の、ひいては社会全体のために生まれたものでも、あらぬ方向へと、その力を働かせてしまいかねない。だからこそ、私の抱いている疑問はこれまでの探究活動の中で「音楽のもつ力を、平和のために働かせるためには何ができるのか」へと変化した。

見えないもの

後藤陽希

私は、「音楽が持つ社会への影響力の活用はどのようにするべきか」という問題意識を持っている。第二次世界大戦中ヒトラーは音楽をプロパガンダのために利用した。音楽にはその結果はどうであれ人を突き動かす力を持っているのは確かだろう。ではその力をいい方向に向かわせるにはどのようにするべきか。残された探究の時間を使い、この問題に少しでも近づけるようにしていきたい。

さて、先日のイベントでは山崎先生をはじめとして山梨県立大学教員の方々を交えての発表となった。我々は基本的に甲府第一

高校（以下、一高）の生徒、その保護者及びその他の高校の生徒に対して発表を行ってきた。一般の方に対して発表することもあるが、今回のイベントの雰囲気と違いカジュアルなものであった。それ故に普段と違う環境での発表の機会であった今回の体験は大変貴重なものであると感じる。今回の発表に関して大学教員の方々からは私たちとは違う視点からの探究・発表のアドバイスをいただいた。その中で特に印象に残っているのは、綺麗な発表では本当は良くないというものである。すなわちうまくいかなかったことや困ったことも言うということだろう。一高での生徒の発表で「きれいな形を目指している」発表以外は聞いたことがない。それほどまでに我々と大きく違う考え方を先生方は持っていた。これほどまでに違うのかという驚きとともに、自分たちの見えていないものを知れることの有難さを痛感した。一高で積み上げてきたもの以外にもそれとは別の見方の両方を取り入れ、私たちの探究及び発表をより良いものにしていきたいと強く感じる。

問いを問い直す

中山蒼平

私は「芸術という分野が社会や経済をどのように形成するか」という点に興味があった。芸術とは人類史において外せないものであり文化を象徴するものである。触れてこない人間は限りなく少ない分野であり様々な人々の心を救ってきた。その中でも音楽は現代の人間が日常的に娯楽として楽しんでいる。しかし音楽にはヒトラーの事例などプロパガンダに使われたこともあり「音楽は世界を平和にする」とは一元的に言えない。音楽は世界を平和にするとともに平和にしないと現時点では答えを出せていない。そこで山崎先生の「問いを問い直す」という言葉に感銘を受けた。わたしはこれまで1つの問いを深め洗練した答えを導き出すことがいわば探究活動における正解だと思っていた。しかし「その

問いこそが間違っているのではないか。」「その問いを問うことは正しいのか」という前提条件を疑うことをしなかった。それこそが探究をする上での規範だと思っていたからである。その考えを改めこれからの探究に励んでいきたいと思う。その問いを立てた明確な理由を確立させ班員皆でこれは正しいのか思念を巡らせたい。同時に疑問に思ったことは問い続けるという習慣をつけたい。答えが出なかったらそういうものだと勝手に終わらせてしまうこともしばしばあった。しかし、それではその命題を探究したその時間が空虚なものになってしまう。結論を出すにもその命題が立証されるか立証されないか導き出し答えが出ないのだとしたら出ない理由というものを求めるようにしたい。山梨県立大学の先生方からもらった知見をもとにこれからさらに探究を深めていきたい。

探究活動において大切であること 宮坂元基

まず、先日県立大学で行われたイベントに参加させていただき、非常に貴重な経験を得ることができたことに、深く感謝したい。私たちは「音楽は世界を平和にするのか？」というテーマのもと、いままで探究活動を行ってきた。この探究を通して、私が特に強く実感したのは、テーマ設定の重要性である。当初、私たちは作曲家ブルックナーの未完成作品である「交響曲第九番」の補筆を探究テーマとして考えていた。しかし、専門的な知識の不足や、十分な時間を確保することが難しいという現実的な問題から、このテーマに取り組むことは困難であると判断し、大きくテーマを変えることにした。このことから、探究活動は「自分のやりたいことに挑戦する」ものである一方、規模が大きすぎる問いを掲げることは、かえって探究の質を下げってしまう可能性があると感じた。自分たちの知識や環境に合っている、適切なテーマを設定

することこそが、探究活動において非常に重要であると考えている。前回のイベントにおいてもテーマ設定に関する質問を受け、テーマを変更した現在においても、なお「問いが大きすぎる」という指摘があった。そこで改めて、「問いの細分化」というキーワードの重要性を再認識した。現在は、「音楽が実際に社会に与えた影響」という、より具体的なテーマへと設定を見直している。また、質疑応答の時間に最も考えさせられたのが、「聴力障害者にとって音楽とは何か」という問いである。その場では、リズムやその場の雰囲気によって音楽を感じ取ることができるのではないかと考えた。しかし、それは音楽の力のすべてなのかという疑問が生じた。音楽は本当に、すべての人にとって等しく享受できるものなのか、そしてそれが平和へとつながっていくのかについて、今後さらに深く探究していく必要があると感じている。

「探究とは何か」プロジェクト

| 51

に参加して

渡部敬子・中 源博

(山梨県立甲府第一高等学校 探究科顧問)

「探究とは何か」のプロジェクトに際し、探究科2年生「音楽と平和」班は、10月17日、11月26日、そして12月19日当日のリハーサルにかけて、山梨県立大学の4名の先生方、橋爪大輝先生、橋本憲幸先生、山崎スコウ竜二先生、森下翔先生にご指導いただき、当日の「〈探究〉とはいかなる営みか？」イベントを迎えた。「ご指導」といっても、実際は生徒の発する意見、考えに対する「問いかけ」であった。「平和とは何か」、「なぜ音楽は平和にするのか」「今日本は平和とはいえるのか」と問いかけられることによって、生徒自らが気づき、自分たちの見えていない部分が明らかになり、個人として、グループとして、課題が再検討されるというプロセスを踏み、「探究」を経験していった。この3カ月間の生徒たちの変化、成長には本当に驚かされた。それは、とりもなおさず、4人の先生方が熱心に生徒の声に耳を傾け、彼らの探究活動に向き合い、忍耐強く対話を重ねてくださったおかげである。そのことに心から感謝している。

19日当日の生徒たちのプレゼンテーションのパワーポイントは丁寧な作成され、正々堂々と発表、またフロアからの質問に必死になって応えようとしている姿も健気であり、生徒たちを誇り

に思った。質疑応答の時間には、参加者から、音楽は平和だけと関連しているのか、銃が音楽として演奏されたことがあり、音楽が戦争意識を高揚されるために使われることもあるのではないか、個人の平和は歌詞のない音楽の方に安らぎを感じるが、なぜ歌詞のあるものを選んだのか、ヒトラーは平和とは程遠いが、なぜヒトラーと平和とを結びつづのか、音楽を聴くことのできない聴覚障害者は平和から外されてしまうのか、「コーラス」の語源は古代ギリシャ劇にあり、古代ギリシャでは、身分の差に関わらず同じものを見て聴いて共に感動する経験によって国家が1つになったという歴史がある、どういものが平和なのか、差別のないこと・戦争がないことが平和の対義語といえるのか、平和と音楽の間には他に概念があるのではないかと等々、今後の探究活動に資する、本質をついた多くのご質問、ご意見を頂くことが出来た。このように、参加者の方々が生徒の発表に熱心に耳を傾け、応答してくださったことに心から感謝している。全体討論では、先生方から「民主主義の社会で平和について考え、言葉で説得し、言葉で解決してゆく、このように実演していること自体が平和につながっているのではないか」「発表は人との対話を深めること、他者の言葉を受け入れていくことだ」「出発は個人でなければならない。自分を突きつめないと世界と向き合うことはできない」と、生徒への厳しくも熱いエールを頂いた。

「探究とは何か」プロジェクトに参加したことによって、先生方、参加者の方々から、社会と世界を形成する重要な言葉をたくさん頂き、探究とは、自由な個人による共同作業でもあることを知らされた思いである。言い換えるならば協働して集合知を求めるプロセスにも感じられた貴重な経験をさせて頂いたことに、探究科の教員として、また英語科や芸術科の教員としても、深く感謝申し上げたい。

なにが私たちを 〈問いを問う存在者〉にするのか

橋爪大輝

(山梨県立大学 人間福祉学部)

なぜ私たちは〈探究〉をするのか。

科目のひとつだから——もちろん、(現役の高校生にとっては)それもひとつの回答であろう。だがここで問いたいのは、そもそも人間にとって〈探究〉という営みが何であり、なぜそれをするのか、である。ある哲学者の思索を手掛かりにしてみたい。

ハンナ・アーレントは、あるテキストで二つの探究、もしくはは問いのあり方を区別している(「プリンストン大学における〈哲学にかんする諮問協議会〉での講演」『手すりなき思考』所収)。「思考による意味の探求と科学による真理の探求」がそれである。科学は、それに対して明確な答えが与えられうる問いを問う。そうした知の蓄積が今日の文明を築き上げた。他方、思考の問いに明確な答えが与えられることはない。アーレント自身の例示に即するなら、科学が「幸福を得るための手段とは何か」と問うなら、思考はそもそも「幸福とはなにか」と問う。後者は「意味」への問いであって、思考は、いったんそれに答えを出したとしても、翌日にはその答えを捨ててまた思索するという。思考は、そのように答えが出ない問いについて考えることを、愉しみさえするのだ。

ではなぜ私たちは——有用性がないとしても——思考するのか。アーレントは、思考は私たちの理性にとって生命の欲求のよ

うなものであると言っている。つまり、生き物が〈なぜ生きているか〉に答えなどないように、理性が〈なぜ考えるか〉にも答えがない。彼女はさしあたり思考にそれ以上のことを求めない。だから、思考による意味への問いは「役に立たない」。だがアーレントは、このような意味への問いこそが人間を「問いを問う存在者」にするのであって、意味への問いがなければ真理への問い(科学)も消滅するだろう、という。

こうして、〈なぜ探究するのか〉という問いへのアーレントの答えは、さしあたり「理由などない」というものになる。私たち(人間)が「問いを問う存在者」であるならば、問うことつまり〈探究する〉ことがそもそも私たちを私たちにするのである。

アーレントの回答は興味深い。だが、ここで私たちは、あえて別様の回答も求めてみたい。私たちは、彼女がたどったのと逆向きの道をたどることもできるように思うのだ。

私たち人間は一種の生命である。生命にあっては、〈存在する〉ことがひとつの〈課題〉となる。糧を得て、敵や危険を回避しなければ、生き延びることができないからだ。生命にとって、存在は生きるというかたちをしている (cf. アガンベン『身体の使用』「プロローグ」5)。だとすれば、生命は存在するために課題を解決し、問いに答えなければならない。このように、生きるという存在様式は、存在に〈問い〉を内蔵させるように思われる。

このとき、けれども、その〈問い〉が生きるということから自立したり、あるいはその〈問い〉を問うこと自体が享受されたりするようになることもあるだろう。つまり、答えのない問いを問うことそのもののために問うということが起きる。こうした途もまた、意味への問いへ至るもう一つの通路であるように思われる。

かくして〈探究〉は、いずれの途を進むにせよ、人間存在の核をなす営み(のひとつ)となるように、思われるのである。

私が私と世界に向き合う | 55

——探究とは何をするのか

橋本憲幸

(山梨県立大学 国際政策学部)

探究は私の問いから始まる。何のための探究かもわからなくなり指示がなくても止められても続けてしまうものが探究である。問いはそれを駆動する。その問いをまだ手にしていないなら政治家や教師の言う社会問題は本当に問題かと疑うところから始めてもよい。問い疑う私とは誰か。私には世界に軽々と順応していない私がいるはずである。問いはどのように立ち上がるのか。

疑問は世界との偶然の出会い直しによって生まれる。私は私と向き合い、他者の存在する世界と向き合う。問い疑い始めた私はこれまでいた世界から離れ、外からその世界を見つめている。世界と並行に立っている。疑問の萌芽は世界への私の違和にある。一瞬の兆候かもしれないそれを書き留める。違和は問題意識の原型である。問題意識とは、世界の諸現象のなかに問題を見出す私に固有の志向性である。では問題とは何か。問題とは理想と現実の隔たりである。〈私の理想〉と〈現実〉の差か、〈現実の理想〉と〈私の現実〉の不一致か。ここでは前者に限定しよう。理想と現実のあいだに懸隔を見出しているのは私の価値基準である。私は何をよいと、正しいと思っているのか。価値基準が埋め込まれた私の問題意識を知るために私は私の内部に降りていかなければならない。世界との再接続のためには私が不可欠である。

世界に疑問はない、世界は好きな物事で溢れている、そういうこともあるかもしれない。では、なぜ問題がないのか、なぜそれが好きなのか。それが私のありえたかもしれない問題を先に解決してくれているから、あるいは私の現在の実際の問題を解決してくれているからではないか。たとえば音楽が好きなのは音楽が私の問題を緩和したり一時的に忘れさせてくれたりするからだとするなら、好きという感性の背後には私の問題があることになる。私だけの問題ではないかもしれない。世界に提起されれば他者が受け取り他者と共に取り組む問題となるかもしれない。

好きな物事が同じでも、その理由＝問題は違うこともある。逆に、好きが違っても抱えている問題は同じこともある。音楽は好きでもその理由＝問題が違う。世界との接続は好きそれ自体でもその理由＝問題からでも可能である。それは同じ物事に疑問を持っている場合も同様である。何かがおかしいと言うときその理由＝問題は複数ありうる。趣味や主張の奥に世界との出会い直しがある。世界との接続線の引き方はひとつではない。

問題は何か、なぜ問題かと問いを重ね、私自身の問題意識にひとたび至り世界と再接続しさえすればよいのではない。探究では私の価値基準自体に疑問を持ち、世界の側の正しさを想像することも欠かせない。私は優生思想の持ち主かもしれない。私の理想を固定したまま世界を眼差すようになると、認識と判断の方程式に諸事象を代入するだけになり、思考は省略される。問いが欠ける。それはもはや探究ではない。探究に私の変容は不可避である。

「向き合う」とは私が変わることである。自分は変わらず相手のみを変えることを暴力と呼ぶ。探究が暴力であってはならない。

探究とは答えを探すというよりも問いを探す営みである。問いがなければ答えもない。よりよい問いの探究は、私と世界の両方を擁護しながら懐疑し更新していく。探究はこのためにある。

〈探究〉の価値

森下翔

(山梨県立大学 地域人材養成センター)

人並みに振り返りたくもない人生を送ってきたので、従来私は過去を省みる習慣が殆どなかった。だが大学教員となり、若い人と接する機会が増えると、頻繁に過去を反芻させられるようになった。以下に記すのは、〈探究〉をおこなう生徒たちの存在に促される形で想起された、昔の自分の戸惑いについてである。

若い頃には信じることができずに、20代も半ばを過ぎた頃から次第に気づいていった価値がある。自らの〈問い〉を丁寧に探究し、それを自らの核として生きることの価値である。

私は1990年代に幼少期を過ごした。ソ連が崩壊して冷戦も終わり、まだテレビ放送などにはバブル経済の余韻がわずかばかり残っていた。当時の私にとってそれは日本に自明に与えられた「豊かさ」であった。「戦争」は過去の出来事であるかのように信じていた。1995年にオウム真理教の地下鉄サリン事件が起き、2001年9月11日にハイジャックされた飛行機が世界貿易センタービルへと突っ込んだとき、それが冷戦以後の、「平和」を自明のものとして享受するささやかな希望の時代の終わりを告げているのだということを理解するには、私はまだ若過ぎた。

少し上の年代の両親に育てられてきたためか、私は軽薄「でない」ものを軽蔑するよう育てられた。若い人には分からぬ空気感

であろうが、私の親の世代は軽薄「でない」もの全般に全体主義の香りを鋭敏に嗅ぎとり、忌避した。「人生の意味」のような「明らかに重要な〈問い〉」は、むしろ問うべきではないものとされたのである。そのような問いはまさにオウムや統一教会に入信した若者たちの心を捕らえた、怖れるべき〈畏〉だった。眼前の、卑俗で、享樂的な経験に没頭することこそが望ましいとされた。

だが私の同世代の多くは違った。バブルの終焉以降の空虚な、「価値あるもの」の存在を誰も信じられない時代。背後では新自由主義が浸透し、リーマンショックの買い手市場で学生が就職活動を行う頃には、「市場価値」を自らの存在価値と思い込み、企業理念を自らの信条であるかのように「真剣に」語る大学生が現れた。とりわけ東日本大震災より以後、「社会の役に立つこと」こそが「価値」であるという空気が社会を支配した。そしてそのような社会の変化に私は目を剥き、戸惑い、そして流された。

同世代の友人を見て、私は両義的な思いを抱いたのだった。当時の私はひとが享樂的な生を追い求めることは当然のことであると信じていたが、「そうではない」と突きつけられたとき、周囲の生への「真剣さ」の装いに底知れぬ恐怖を感じた。「真面目に生きてはならない」のではなかったのか、と。同時に、「社会の役に立つこと」こそ至上の価値であるという主張に「薄っぺらさ」もまた嗅ぎ取っていた。以来私は、自分が追求すべき〈問い〉について、読書をつうじて真剣に考え育むことを覚えていった。

それから15年ほどが経つ。「社会の役に立つこと」は、ますます重要な「価値」となっているとひとは言う。だが20代の頃に「真剣」に見えた人達は、その空虚さが露呈し、目まぐるしく変化する社会に翻弄されているようにも見える。「自分が追い求めるべき価値を時代に流されて他人に委ねてはならない」という単純な話が、〈探究〉の営みが必要とされる理由であると私は思う。

日常の探究：宇宙と一輪の花

山崎スコウ 竜二

(山梨県立大学 地域人材養成センター)

探究とは、問いを育むことである。今日も一つ問いなおそう。

1. 今日の晩ご飯は何かな？
2. 今日の晩ご飯、何にしようかな？

上の問1は贅沢に見えるし、2も贅沢だろうか。それはなぜか。キミにとっては、どちらの問いが大事だろうか。それはなぜか。ここにキミと私で〈晩ご飯探究班〉が生まれ、活動が始まった。

Day 1：答える。ご飯どうなるか／どうするか問題で、どちらの問いでも Smørrebrød だったり Sushi だったり、答えは品。

Day 2：視点を変える。作らなくて良いので、受け身には贅沢さがある。他方で何を作るか、味付けも選べないのは自由がないので poor でもある。楽しんで作れたらどうか。豊かさとは何か。

Day 3：情報収集する。世の中を見渡す。便利な商品がある。使うと楽なことがわかる。おいしいが工夫できず学びも少ない。

Day 4：得られた結果を解釈する。それなりのご飯はできたが、品と味を選んでいるようで、選ばされているのではないか。私たちは社会に対して受け身で良いのか。味わう力は人任せで良いか。

Day 5：社会構造を問う。欲望をターゲットに、かつエンジンとして駆動する仕組みは何か。現代の資本主義では、晩ご飯は単に生理的感覚の問題ではなく、開発と操作の対象になっている。

Day 6: 世界観を問う (Day 2 の問題の再設定)。私たちは自由意志を持つ。気のせいなのか。開発されているのは味覚だけでなく思考も対象か。人の思考や意識さえも開発しうる市場と技術は、自律の尊重という倫理原則とどのような関係にあるのか。また、資本主義に見られる成長とは善なのか。価値の置き所を考える。

Day 7: 神話を問う。社会の価値観や未来像は何に基づくのか。自己選択は幻想か。晩ご飯を自由に選んでいると思ったら幻想でそんな自由はそもそも存在しないのか。あるいは干渉のない自由という概念の再考が必要か。私たちが信じてきたことの根っこに何があるのかを考えよう。たとえば、自由な社会へ向かう「進歩の物語」は、専制主義に逆行する現実と乖離していないか。人間の自由を奪い、支配する「機械への恐怖」のイメージは妥当か。

7日間の探究後、キミは問2の自由の謳歌にどんな迷いや疑問を持つようになっただろうか。翻って、問1にどんな意味を見出すようになっただろうか。食べさせてもらうというのは相手のホスピタリティに与り、好みさえ気遣わせて奉仕を受ける主人にってもらうことでもある。逆に、相手が食べたいものを食べられるように振る舞い、その意味で主となるように迎え入れる鷹揚さという自由は、自己主張の自由の意義や価値に揺さぶりをかける。

「哲学はどこにでもあってどこにもない」とメルロ＝ポンティは言った。探究の機会もまた、どこにでもある。そして、歩いたところに道ができる。今日キミは何をどう問いなおすだろうか。

世界は不思議に満ちている。だからご飯の話でも探究は不意に始まる。私は部活で走りながら空を見上げ、宇宙の果てをめぐる問いが降ってきた。コースに生えた一輪の花に出会ったことで、摘むべきかと反芻される問いが芽吹いた。今やその花はロボットと化し、人間性とアンドロイド性を問いかける。今、親切さは物が獲得こそせよ失うものではない。人はどうか。詩は救えるか。

探究を探究する

—2025 年度山梨県立大学 地域研究交流センター 地域
貢献事業「探究を探究する：山梨県立甲府第一高等学
校「探究科」をフィールドとして」成果報告書

2026 年 2 月 28 日 初版第 1 刷発行

編 者 橋爪大輝・橋本憲幸・森下翔・山崎スコ
ウ竜二

発行所 山梨県立大学 地域研究交流センター 地
域貢献事業「探究を探究する」

